

第12回 三翠化学会関西支部交流会報告



その第十二回交流会は、平成二十二年一月一三日、来賓として三翠化学会会長の小畑先生にご臨席賜り、また特別講演の講師として、三重大学名誉教授の梅林先生をお招きし、新大阪のホテルクライトンにて開催いたしました。

和五十九年二月に第一回が開催された関西支部総会は、平成十三年からは毎年秋に開催する定例会に発展し、昨年度、第二回をおこなうことができました。

第一部は、関西支部総会です。今年は若手中心の運営ということで、岸田さん(大36)の司会によって進められました。来賓としてお越しいただきました小畑先生からは、「変化のスピードが激しく、来年にはまた何か変わっているかもしれない」と時代の変化とそれに備える姿勢の大切さについてのお話があり、関西支部といえども時代は遅れないように研鑽をつみ、また支部会員の交流を図っていくべきと身のひきしまる思いです。

選出された伊藤議長(大21)のもと古橋支部長(大19)からの平成二二年度の活動報告がされました。引き続き、堀幹事(大28)の会計報告、細見幹事(大4)から会計監査報告と滞りなく総会は終了しました。第二部は、お楽しみのお話です。古橋支部長(大19)の司会にて、今年度は三重大学名誉教授の梅林先生をお招きし、「独りぼっちの木根運動」のいないNC「O」という先生が一六年前にお一人で始められた梅やマナオ(タイのライム)を植えるボランティア活動について(マイク無し)お話いただきました。昨年訪問回数も七七回となり、今までに寄贈・植樹した本数は梅二万二千本、マナオ一万八千二百本にもなるそうです。植樹を行っているタイ北部の山岳地帯の村は、かつて黄金の三角地帯と呼ばれケシの栽培で生計を維持してきた地域。「ケシを梅に変えたい」と始められた活動により、植樹された梅やマナオの我が村の生活の向上に役立っています。退官後のニューライフ、自立と参加、自己実現のための梅林先生のモットーは、夢とあ(遊び心、あくなき好奇心)を持ち、そ(想像する喜びを)び(美と美味の世界へ!)とのこと、タイではマナオ先生と親しみをこめて呼ばれ、先生ご自身も楽しみながら年一回、三月ずつ滞り、活動を続けておられます。大学時代、あんなに怖かった梅林先生(それはちゃんと勉強しなかつた自分が悪いのか?)のタイでの楽しそうな様子、自分の今後の人生設計において学ぶべきところがたくさんありました。

C9クラス会 (in 蒲郡)

C9クラスは昭和36年卒、当初29名、現在は25名で、卒後50年を迎えました。昨年、平成22年10月6日、17名が愛知蒲郡の「ホテル竹島」に一泊、16回目となるクラス会を開きました。

クラス会は当初、オリンピックの年、四年毎だったのを平成14年から隔年開催とし、その都度次期役員を決めてやって来ました。

ホテル竹島は、竹島と竹島橋を目前にする三河湾の絶景ポイントの一つです。昼間の景観はもちろん、夜は海面に映える橋灯の幻想的な雰囲気格別でした。

宴会は、慣例によって、ひとりづつ近況報告で始まり、持ち時間をオーバーして、趣味や病気克服の紹介に熱が入りました。

部屋に集まった二次会でも時を忘れ、齢を忘れ? あつと云う間に夜は更けていきました。意外だったのは、前回に比べて酒の予算が大幅に余ったことです。幹事としては喜ぶべきが微妙な心境でした。

翌日も快晴に恵まれ、全員で近くの「生命の海科学館」へ。地球の誕生、生命の大爆発、進化などをテーマに化石や隕石の展示、ミュージアムシアター等熱心に見学しました。又、中国に落下したと言う855kgもある実物の隕石には強く惹き付けられました。何故ここに在るのか、説明を聞いてやっと納得。

更に、この日は大潮とあって、潮がすっかり退いた海辺を見ながら、海面から橋脚を高々と現した竹島橋を渡り竹島へ。渡橋組は、青い空、遠近の効いた橋と橋脚、高嶺の花の「蒲郡プリンスホテル」を背景に一枚、ベストショットが決まりました。

昼食後、関西地区での再会を約して散会しました。次回は小木曾、坂東両君にお願いし、この間、卒後50年エッセイ集の編集、記念行事等するしないも含めてお任せすることになった。(山口昌宏(大9回))



今、私は

小林謙一(大47回)

南半球でのプラタナス・ロード(鈴懸の径) シドニー大学留学記



もうすぐ九月、そろそろ冬が終わりをつけて春が訪れようとしている、ここシドニー。朝早く、Chatswoodという郊外の駅で、二階建てのダブルデッカーという列車に飛び乗る。そして、オペラハウスを横目に見ながらハーバーブリッジを通り抜け、そのままCityの中心部を抜けると、Redfernという小さな煉瓦造りの駅に到着する。駅を出ると、Cityの高層ビル群を背景にして、目の前にはテラスハウスの古い町並みが続く。なんとなく京都の町家のように思えるのは私だけだろうか。そこを歩いて行くと、Abercrombie Streetに出る。すると、あれはプラタナス(？)たぶんだろうか、独特な形状の実をつけた木々が目に入る。そんなことでこの道を、昔の歌謡曲でジャズにも編曲された「鈴懸の径」(プラタナス・ロード)と自分の中で勝手に名付けてしまった。そして、この道をしばらく歩み、右に曲がるとすぐに、私が今いるシドニー大学のキャンパスに入る。この道を行き来するようになって、早いもので四ヶ月が経とうとしている。

ておりました。三重大学卒業後、京都大学大学院農学研究科の福岡伸一助教授(現 青山学院大学教授)のもとで、大学院生活を送り、博士学位を取得いたしました。その後、日本学術振興会特別研究員として青山学院大学で研究生活を経て、東京農業大学応用生物科学部生物応用化学科(旧農芸化学科)の栄養生化学研究室(田所忠弘教授、山本祐司教授)に助教として着任し、現在に至っております。今回、所属大学からの依命留学で、シドニー大学のオーストラリア顕微鏡微量解析センター(Australian Centre for Microscopy & Microanalysis (ACTM))に、客員研究員(Visiting Scholar)として所属させていただきます。研究を行っております。

シドニー大学(The University of Sydney)は、オーストラリアのシドニーにあるこの国最古の大学(一八五〇年創立)です。この大学は、オーストラリア八大学(Group of Eight)に属し、世界大学ランキングでも常に一〇〇位以内に数えられるなど、高い教育・研究水準を誇っております。そのなかにあるACTMは、大学内における顕微鏡および微量解析機器の共同利用施設として機能しています。また、オーストラリアの八大学で組織されたAustralian Microscopy & Microanalysis Research Facility (AMMRF)の本部として位置づけられており、この国の顕微鏡と微量解析の拠点となっています。私は、ACTMの副センター長をしているFilipeBrai博士をSupervisorとして、蛍光電子線相関顕微鏡観察法(Correlative Light Electron Microscopy: 以下CLEM法)を用いて、大腸癌の抗癌剤耐性機構を形態学的に解析しています。このCLEM法は、蛍光顕微鏡を用いて癌細胞(おもに培養細胞)を生細胞観察した後に、同一サンプル(細胞)で透過型電子顕微鏡観察も行ってしまおうという観察方法です。従来は、これらの顕微鏡観察

は、異なるサンプルを用いて行なうことが主流でしたが、どうしても実験間で誤差が生じてしまい、抗癌剤に対する耐性機構を研究する上で大きな問題点となってきました。その突破口となる知見が得られると期待されているのが、このCLEM法です。私は、大腸癌のモデル細胞であるCaCo2という培養細胞を用い、蛍光標識した抗癌剤を投与した後、この薬剤が細胞内でどこに分布していくのかについて、CLEM法で追跡するという実験を行ってるところであります。ここで、身につけた技術と考え方を日本に持ち帰り、大腸癌の予防や予後の改善に機能するような食品因子の探索など、栄養化学の分野で、応用できればと考えております。

現在、久々に学生時代に戻ったような、研究と勉強に没頭できる幸せな日々を送らせていただいております。この生活は、来年の三月まで続きます。この毎日「通い慣れた」プラタナス・ロードが、帰国後、「鈴懸の径」の歌のように、よき「思い出」の道となるだけでなく、よき「未来」への道であったと誇らしく語れるように、残りの日々を有意義に過ごして参りたいと思っております。

最後に、今回の留学に関しては、東京農業大学はもとより、三重大学時代の多くの方々のお世話になりました。古市先生には、農大着任後も研究など多くのご教示を賜っておりますし、栄養化学研究室の先生や諸先輩方にも支えていただいております。とりわけ、三重大学時代の恩師である大久保武先生(当時、三重大学遺伝子実験施設助手、現在茨城大学農学部教授)には、今回の留学にあたり、私が非常勤講師で講義しております大学の講義をお引きいただきました。このような三重大学時代のネットワークがなければ、おそらくこの留学は実現しなかったことでしょう。この場をかりて厚く感謝申し上げます。

栄養化学。栄養機能工学研究室

「111回記念」

平成二十三年三月という月は、僕の脳裏に忘れられない記憶が二つ、まるで写真に自動的に印字される年月日のように、刻み込まれた月でした。一つは言うまでもなく東

日本大震災。その時は、四才の息子を連れて、東京のある大通りを歩いていました。突然、周囲のビルから沸き起こった悲鳴と、かすかな地鳴りのように、その実はビルがわずかに振動

する音が交錯し、その中で僕は一瞬、息子を抱きしめたまま、迷子のように立ちすくんでいました。東京ではそれからしばらくの間、人々の非科学的な行動による水不足、ガソリ

不足に悩まされました。また放射性物質という文字通り「見えない恐怖」に人々の不安感が募り、節電というかつての「美辞麗句」は、世界最大の大都市から、活力を一気に奪い去っていきました。とはいえ、この原稿を書いている今は夏。東京の活力はかなりの回復し、

人々の生活、企業活動もほぼ通常に戻りました。しかし被災地の方々の苦労は今もなお続いています。そんな中でいただいた栄養化学研究室(現・栄養機能工学研究室、以下単に「栄養」とします)の梅川逸人先生からの一通の電子メールは、大震災「後」のこと

しか考えてこなかった僕の頭に、大震災「前」の、比較的新しく、そして楽しかったもう一つの記憶を、問欠泉が一気に噴き上げるがごとく呼び覚ましてくれたと言うのは、決して大袈裟な表現ではありません。

平たく言えば「三翠化学新聞」に同門会の原稿を書けという、怖ろしいけれどもありがたいメールなのであります。

三月五日、名古屋駅近くの

今、私は

鎌倉昌樹 (大42回)

私は平成六年に三重大学生物資源学部を卒業しました。その後、京都大学大学院農学研究科、民間企業を経て、現在、富山県立大学工学部生物工学科で講師として研究・教育活動に従事しております。私の研究対象は、動物(特にシヨウジョウバエとミツバチ)の発生生物学で、現在はミツバチの女王蜂分化誘導機構の解析やシヨウジョウバエを用いた形態形成の分子機構の解析などを行っております。私が昆虫を用いた発生生物学の研究を始めたのは今から六年前で、それ以前は民間の企業で機能性食品因子の研究を行っておりました。その当時与えられた研究課題がローヤルゼリーの機能性の証明というものでした。ローヤルゼリーは健康食品としてよく知られた素材ですが、当時ローヤルゼリーの機能性の科学的な証明がほとんどなされていませんでした。研究の結果、ローヤルゼリーの中から新たな機能性因子を見いだし、その作用メカニズムについても詳しく解析し論文として報告しました。私は、その研究を行っている過程で、ローヤルゼリーを分泌するミツバチの生態に興味をもつようになり、ミツバチは女王蜂と働き蜂からなる階級社会(カースト)を形成しており、同じ遺伝子型をもつ個体が幼虫の間に働き蜂が

「山海百味 そら豆」において、栄養の「三二同門会」が開かれていたのです。僕を含めて四名が幹事(発起人)となり、「幹事がメンバーなどで簡単に声をかけられる範囲内」で「同門会をしようじゃないか」ということで、開催されたのでした。これが、忘れられない平成二十三年三月の、「もう一つの記憶」でした。

会には、古市幸生先生(前教授、現在名古屋女子大学教授)、梅川先生(大学教授、講師に就任したばかり、業生もしくは修了生とい

う、まさしく「三二」同門会でした。したがって、今回お声がけができなかった農学部時代の卒業生をはじめとする皆様や、都合が悪く欠席された皆様には、本格的な「同門会」はまたの機会にということ、今回はご寛恕いただきたくお願い申し上げます。

というわけで、言い訳ではないのですが、ここで「三二同門会」を開催するに至った経緯を、少しだけ暴露しておきましょう。

平成二十二年八月、久しぶりに津へ帰った折、三重大学に梅川先生をお訪ねし、続いて名古屋で古市先生とお会いする機会を得ました。その時の昔話の会話の中で、「栄養の同門会があるといいですね」というような話が出ました。私が切り出したのか、先生の方から切り出されたのかは記憶にありません。

分泌するローヤルゼリーを摂取した個体のみが女王蜂へと分化しています。女王蜂は働き蜂に比べ、体サイズが一・五倍、寿命が二〇倍であり、卵を一日に二〇〇個産むという特徴をもっています。しかし、当時この女王蜂への分化のしくみについてはまったく明らかになっていませんでした。そこで、私はこのミツバチのカースト分化に興味をもち、さらにこの現象を解明したいという思いになり、富山県立大学に赴任してからミツバチの発生の研究を始めました。ミツバチのカースト分化について詳細な解析を行った結果、ローヤルゼリー中の「ロイヤラクチン」と命名した成分が上皮増殖因子受容体シグナルを介して女王蜂の分化を誘導することを世界で初めて明らかにしました。この研究成果は本年度四月に英国科学雑誌「Nature」に掲載されました。ミツバチの生態は新たな研究課題として注目されている「エピジェネティクス」を象徴する現象であり、ミツバチの生態の解明がこれまでに未知なエピジェネティックな制御による病気の解明にもつながる可能性もあることから、さらなるミツバチの生態の解明に向けて日夜研究に邁進しております。私の研究モットーは「世のため人のため社会のため」の研究をする」です。この目標を達成できるようなオリジナルの研究をこれからも進めて行きたいと思っています。



この時はまだ「あるといいですね」のレベルだったのですが、九月上旬に東京で日本食品科学工学会があり、古市先生や若庵さん、大槻誠さん(平成一八年博

士了、鈴鹿医療科学大学助教)らが上京されて、僕や堀部敦子さん(生二回卒、内閣府食品安全委員会事務局課長補佐)も含めて八人くらいで渋谷で飲んでいたら、「じゃあちよっと計画を立ててみましようか」のレベルに格上げされたのです。その後、まずは幹事(というか世話人というか)を決めなければならなかったわけですが、結局のところ、呼び掛け人である僕と、時々顔合わせ合っている東京在住の堀部さんと小林謙一さん(生八回卒、東京農業大学助教)そして、おそろしく同門会の場所は名古屋あたりになるだろうから、その近くにいる関係者ということで大槻さん、以上四名で幹事をやるうじやないかということになりました。

とはいえ、本格的な同門会を開くと、普段はそれぞれの仕事を抱える身として、はたとえ四名いたとしても事務量が大幅になりますので、とりあえず、先生方の了承を得た上で、「幹事が声をかけられる範囲内」で「こちまるところが、これがまた問題と

うことになりませんが、ここであまりにも拘り定規になり過ぎるのも考えものです。ある卒業生A君とB君がいて、四人の幹事のうちの誰かが電子メールを送れるのはA君だけだったとします。で、A君に電子メールを送ったとして、A君とB君は同級生だから当然その情報はB君にも伝わる。さあそこで、B君には4人の幹事の誰も声をかけられないからダメ、というわけにはいきませんから、いわゆる口づて(もしくはメールを通じて)で、同門会の情報は広がっていくことになりました。

従って、今回の参加者の範囲というのは、正確には「幹事が声をかけられる範囲」ではなく、「幹事が声をかけることができ、かつそこから情報が伝わった範囲」ということになった次第です。

だいたい参加人数が確定したのは二月。その後、お店の予約を大槻さんが行い、そうして当日を迎えることになりました。

さて、会自体は昔ながらのチャンチャンバラバラ、あはははははは、ガハハハ

平成二十三年八月二七(木)に食品化学研究室・食品資源工学研究室の同門会が開かれました。場所は名古屋駅近くの庵CURU名駅です。ちなみに研究室同門会はこのところ、津駅と名古屋駅のどちらかで開かれています。

今回の同門会には二五名の方に出席いただきました。冒頭、久松先生から今年度

八八八という典型的な「飲み会」でした。僕は幹事の代表でありながら、当日は勤務先の大学の入試監督という仕事があったので、それが終わってから新幹線に飛び乗って名古屋にやって来たものです。会の後半しか出ていないので、ここから先の話は堀部さんや大槻さんからの情報が元になっています。

会場の「山海百味 そら豆」の一階の中央付近を陣取るような形で、もちろん陣取るように配置したのはお店の人。三月五日、底冷えのする週末の夕方七時に、栄養出身者三〇名が一室に会しました。

会は、木の柱や建具が「和」の雰囲気漂わせる薄暗くもしつとりとした空間で、幹事代表として堀部さんの挨拶、そして古市先生の乾杯の音頭によりスタートしました。特に「出し物」のようなものはありません。いくつかのテーブルの「島」に分かれて座席について同門生たちは、適当に座を交代しながらわいわい、がやがやと、旧交を温めながら楽しく過ごすことができていました。

で定年を迎えられますが、継続雇用で来年度も大学に残られるとお話を頂きました。卒業・修了生からは、「エー、もうそんなに時間が経ってしまったの?」との声が上がりました。

今回の最年長は、勝崎裕隆先生でした。現在勝崎先生は生物圏生命科学生命科学工学研究室にいらっしやるの

きました。進行する会の途中では、栄養の現役教員である梅川先生と西尾先生の一言を頂戴しました。

特に出し物はなかったのですが、多くの出席者の印象に残っていたのが、辻輝也さん(生一六回卒、屋久島ガイドクラブ所属ガイド)による「みかん配り(一)」だったようです。辻さんは当日、リュックサック一つで屋久島から中部国際空港に降り立ち、そのまま同門会に参加してくれました。ほかに、若手チームのテーブルでは、神山季実代さん(生一四回卒、O.V.I.E.松坂屋店商品開発担当)が関わっているバームクレーンが大変好評で、同門生の結婚式の引き出物に使われているという話で盛り上がりましたし、ある程度歳を重ねたチーム(生物資源の卒回が「ヒトケタ前半」)のテーブルでは、当時の栄養を彷彿とさせるようないろいろなお話(マラソンの話や研究の話)はまたそれなりの年齢になってからから仕事の話で盛り上がるなど、あちらこちらでいろいろな話題が、石つ

ぶつのように飛び交う楽しい会になりました。

最後に、遅参のお詫びを兼ねて僕がほんの一言ご挨拶した後、先生方を除く最年長者であった若庵さんの音頭による三重大学応援歌(めっちゃくちゃ気恥ずかしかったですが)で、見事! 締めくくられました。その後、三々五々となるはずが、大人数で入れるお店は限られており、結局半数近くの参加者が近くの居酒屋にはしご。最終電車にのりそびれた人がいたとかいな

武村政春(大40回 生一回)です。

この楽しかった一時の記憶が、大震災から復興しようとしているこの日本をこれから支えていこうと頑張っている参加者一人ひとりの中で、あの三・一一を乗り越える原動力になり続けていってほしいものだと、そう願わずにはいられません。



おりました。

最後に、いつも同門会の事務方を担当してくれている研究室の学生さんたちに感謝します。

次回もよろしくお願いたします

三島 隆 (院29回)

が助教教授、梅川先生が助手、そして西尾先生はまだ学生だった時代でした。今回集まってくれた同門生は、まさに三先生が厳しくも和やかに学生を指導されていた頃から、古市先生が高橋先生の遺志を継ぎ、教授として研究教育を牽引し、そして梅川先生が支えてこられた頃の栄養を見てきたわけ

です。僕にとつて三月五日の夜が、栄養の同門生にはそうした恩師の姿に再び接することを喜ばない人など居ないことを確信した夜になった、というのは、まさに幹事冥利に尽きると言ってもいいでしょう。

昔の仲間たちとの再会には、どのような状況であっても楽しく、心温まるものです。

◆挑戦

原 弘 (大8回)

一九五六年に入学、一九六〇年に卒業しましたが、勉強はあまり熱心でなく、むしろ運動に明け暮れていました。四年生になり故田中庄助先生の醗酵学教室にはいり、卒論として故澤田寿々太郎さんの指導のもと、グルタミン酸を醗酵法で生産する効率の良い菌を探す研究に取組みました。各地から取寄せた土壌から菌の分離と培養を毎日まじめに取組みました。当時、昇昇を使って無菌箱などを殺菌しておりました。数えきれない程分離しました。おおよそ千株ぐらいだったと思います。それ迄は気に留めなかったのですが、夏頃に両手の爪が驚く程黒くなり、まるで墨でマニキュアをした様になりました。一九五九年の伊勢湾台風の時も、外はやけに風が強いなと感じていましたが夕方遅くまで一人、研究室で実験に夢中になっていました。外に出ると大きな木が根元から倒れたり、当時の校舎の屋根はスレート瓦でしたのでそのスレートが強風で剥れ、ビュンビュン飛んでくるのには肝を冷やしました。その後は皆さん御存知の災害です。

産生されました。卒業直前になっても卒論は手付かず、このままだと卒業ができませんが教授のいきな計らいで、就職してから提出することを条件に卒業を認めてもらいました。五月の連休明け迄かかりようやく纏めて提出した次第です。実験は順調に継続され、当時日本一のグルタミン酸の生産能力のある菌と判りました。このときの経験が社会人になってから現在迄生きており、「まじめにやれ、最後の最後迄あきらめな」と云うことです。

サラリーマン時代、製造現場勤務が一年間、その後は営業部門勤務でした。当時、マージャン、ゴルフなどしている人を見れば、無駄な時間、金など浪費し、実際に稼がない遊びだと思っておりましたが、営業職になると酒やそれらをやらなると仕事になりませんでした。一生懸命やりました。実際やってみれば実に面白く、人脈も広がり、今も楽しんで仲間と遊んでおります。

体力が衰えた実感を感じ始めた五〇才代になりスポーツクラブに入会し水泳も始めました。最初は息継ぎがむづかしく五〇mも連続して泳げませんでした。何とか泳げる様に練習を続けている過程で色々と自分なりの工夫をしました。クロールでは息継ぎの時、水中で息を吐く。頭部はできるだけ水面より上げない。体を左右にローリングし乍ら腕を伸ばすと共に、顔の側面

油絵は九月の一陽展に出品する為、毎年F百号、サイズは一六二〇mm×一三〇〇mm、八方キ約一四三枚分の面積になります。描いており、今年もようやく八月中旬に仕上がりました。日本には全国規模の絵画グループが三百団体ぐらいあり、そのうち約二〇のグループが歴史ある団体です。一陽会も大きな団体です。東京上野にあった国立美術館が六本木に移転し国立新美術館と名称を変えまして。毎年九月より十月にかけて二週間開催され作品を出品、発表しております。絵を習い始めて十二年になり少しは良い作品ができるかと思っておりますが、まだまだ素人の中の素人です。考えが甘かったです。

今年七五才になりましたが幸せなことに大きな病気がせず、ゴルフ、マージャン、水泳もやり、今も食品会社で働かせてもらっております。有難い限りです。学生時代から今日迄関係してきた周囲の皆さんに支えて頂いていると痛感しております。今後も自分のペースで色々の事に挑戦したいと思っております。

三翠化学会の財政逼迫 定された暁にはご協力の程よろしくお願い申し上げます。 経緯 三翠化学会は昭和四十八年一月発足以来長い歴史を誇っております。初代会長嶋林先生の玉稿にもありますように、その間母校は農学部から生物資源学部へ改組されましたが、本会は農産製造科、農芸化学科、農芸化学コースの卒業生によって構成され、毎年一回の会報「三翠化学」を発行し、活発に活動して参りました。

日常の活動は会員の皆様から頂いた年会費(当初五〇〇円、その後二〇〇円)により運営され、昭和五十三年―五十五年には会員からの募金による基金が設立され、主として在校生と支部への支援が行われてきました。

平成十二年生物資源学部の改組にともなう農芸化学の名称がなくなり、三翠化学会への新会員の受け入れが停止され、これ以降は会が徐々に成熟していくことになりました。また、同窓会費は入学時に納入から三翠同窓会に一括して納入頂くことになり、三翠化学会でも卒業生である現会員からの会費納入を中止し、親同窓会に納入される会費の当会への配分で運営して参りました。しかし、時がたつて、改組後に入学し卒業する学生による同窓会への配分比率が相対的にふえ、我々旧来の同窓会組織への資金配分が減って参りました。現在は過去の蓄積を食い潰しながら活動しているのが現状です。

三翠化学会会長 小畑 仁

三翠化学会のホームページのお知らせ 検索サイトで三翠化学会を検索いただくか、以下のURLでアクセスください。 URL http://sansui.bio.mie-u.ac.jp/dosokai/ kagaku/kagaku.html 機関紙「三翠化学」のPDFもダウンロードできます。同窓会、同期会、研究室の同門会の開催予告など ださ。 Kariha@innov.mie-u.ac.jp

一九五六年に入学、一九六〇年に卒業しましたが、勉強はあまり熱心でなく、むしろ運動に明け暮れていました。四年生になり故田中庄助先生の醗酵学教室にはいり、卒論として故澤田寿々太郎さんの指導のもと、グルタミン酸を醗酵法で生産する効率の良い菌を探す研究に取組みました。各地から取寄せた土壌から菌の分離と培養を毎日まじめに取組みました。当時、昇昇を使って無菌箱などを殺菌しておりました。数えきれない程分離しました。おおよそ千株ぐらいだったと思います。それ迄は気に留めなかったのですが、夏頃に両手の爪が驚く程黒くなり、まるで墨でマニキュアをした様になりました。一九五九年の伊勢湾台風の時も、外はやけに風が強いなと感じていましたが夕方遅くまで一人、研究室で実験に夢中になっていました。外に出ると大きな木が根元から倒れたり、当時の校舎の屋根はスレート瓦でしたのでそのスレートが強風で剥れ、ビュンビュン飛んでくるのには肝を冷やしました。その後は皆さん御存知の災害です。

産生されました。卒業直前になっても卒論は手付かず、このままだと卒業ができませんが教授のいきな計らいで、就職してから提出することを条件に卒業を認めてもらいました。五月の連休明け迄かかりようやく纏めて提出した次第です。実験は順調に継続され、当時日本一のグルタミン酸の生産能力のある菌と判りました。このときの経験が社会人になってから現在迄生きており、「まじめにやれ、最後の最後迄あきらめな」と云うことです。

サラリーマン時代、製造現場勤務が一年間、その後は営業部門勤務でした。当時、マージャン、ゴルフなどしている人を見れば、無駄な時間、金など浪費し、実際に稼がない遊びだと思っておりましたが、営業職になると酒やそれらをやらなると仕事になりませんでした。一生懸命やりました。実際やってみれば実に面白く、人脈も広がり、今も楽しんで仲間と遊んでおります。

体力が衰えた実感を感じ始めた五〇才代になりスポーツクラブに入会し水泳も始めました。最初は息継ぎがむづかしく五〇mも連続して泳げませんでした。何とか泳げる様に練習を続けている過程で色々と自分なりの工夫をしました。クロールでは息継ぎの時、水中で息を吐く。頭部はできるだけ水面より上げない。体を左右にローリングし乍ら腕を伸ばすと共に、顔の側面

油絵は九月の一陽展に出品する為、毎年F百号、サイズは一六二〇mm×一三〇〇mm、八方キ約一四三枚分の面積になります。描いており、今年もようやく八月中旬に仕上がりました。日本には全国規模の絵画グループが三百団体ぐらいあり、そのうち約二〇のグループが歴史ある団体です。一陽会も大きな団体です。東京上野にあった国立美術館が六本木に移転し国立新美術館と名称を変えまして。毎年九月より十月にかけて二週間開催され作品を出品、発表しております。絵を習い始めて十二年になり少しは良い作品ができるかと思っておりますが、まだまだ素人の中の素人です。考えが甘かったです。

今年七五才になりましたが幸せなことに大きな病気がせず、ゴルフ、マージャン、水泳もやり、今も食品会社で働かせてもらっております。有難い限りです。学生時代から今日迄関係してきた周囲の皆さんに支えて頂いていると痛感しております。今後も自分のペースで色々の事に挑戦したいと思っております。

三翠化学会会長 小畑 仁

三翠化学会のホームページのお知らせ 検索サイトで三翠化学会を検索いただくか、以下のURLでアクセスください。 URL http://sansui.bio.mie-u.ac.jp/dosokai/ kagaku/kagaku.html 機関紙「三翠化学」のPDFもダウンロードできます。同窓会、同期会、研究室の同門会の開催予告など ださ。 Kariha@innov.mie-u.ac.jp

かつての講義室の面影を残す附属農場の講義室

かつての講義室の面影を残す附属農場の講義室

かつての講義室の面影を残す附属農場の講義室



写真：「磯焼け」平成22年度一陽会の入選作品です(国立新美術館にて)

三翠化学会の財政逼迫

定された暁にはご協力の程よろしくお願い申し上げます。

経緯

三翠化学会は昭和四十八年一月発足以来長い歴史を誇っております。初代会長嶋林先生の玉稿にもありますように、その間母校は農学部から生物資源学部へ改組されましたが、本会は農産製造科、農芸化学科、農芸化学コースの卒業生によって構成され、毎年一回の会報「三翠化学」を発行し、活発に活動して参りました。

医学部附属病院新病棟

医学部附属病院新病棟が完成し、開院式典が挙行されました。(平成二十三年十一月二五日)



教室の机

大学に入学する前は、大学の教室は階段教室のようなイメージだったが、最初の講義で座った椅子は、机椅子一体型のものであった。この机椅子は多少カールチャイショックで、座りにくかった覚えがある。現在の講義室では、机と椅子は別々なものとなっており、また、全ての講義室に、天井から下り下げ式の液晶プロジェクターが配置され、講義、ゼミなどで、活躍している。一体型の机椅子は今でも、附属農場の講義室で使用されている。(荻田修一(大30回))



左、かつて学部講義室、共通教育で使用されていた机椅子一体型のもの。右、現在、学部講義室で使用されている机椅子。



かつての講義室の面影を残す附属農場の講義室

記念樹の今

農芸化学大2回生 卒業35周年記念樹 (平成元年9月30日植樹)



平成23年11月撮影

お知らせ

事務局より、「三翠化学」への皆様の投稿をお待ちいたしております。近況、なつかしの写真、同期会、同門会などを開催された幹事様、ぜひ、ご連絡ください。